東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

潜在的カリキュラムとしての小学校教師の特質：教師文学作品の分析を通した教師文化研究

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2011-06-15
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 佐藤,郁子, 平野,朝久
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/108079

東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅰ　62: 71－80，2011.

潜在的カリキュラムとしての小学校教師の特質

―― 教師文学作品の分析を通した教師文化研究 ――

佐　藤　郁　子*・平　野　朝　久**

教　育　学

（2010年9月27日受理）

1．問題意識と研究の意図

明治から現在まで，小学校教師は，さまざまな視点で語られてきた。教育の変遷は，同時に教師論や教師像の変遷でもある。理想の教師像や期待される教師像は多様であり，時代は絶えず新しい教師像を要請し，「教師よ，かくあれかし」と提言を繰り返す。時代や社会の要請を受けて注目されてきた教師は変わることを余儀なくされる。おもてにあらわれた教師の姿は，時代の価値観を反映した期待される教師像と一致していく。外からの規準を受容した姿である。

しかしながら，果たして教師は，このような自らの有り様をどう思い，外部の価値と教師個人の仕事や生活をどのように折り合いをつけながら日々営んでいるのであろうか。多様な個性を持つ教師たちが，一様の教師像を志向する過程において，一律の教師らしさを獲得していく。ここに，教師の個人的な資質や能力の問題に帰するだけでは解決されない，教師という職業経験から形成される教師特有の思考・行動様式が存在するのではないかという仮説が成立する。

本研究では，教師特有の教師文化[1]と呼ばれるものの存在を仮定し，小学校教師が共有しているであろう教師の特質を探ることを試みる。教師の特質は，教師自身が意識することなく暗黙裏に作用していると考えるならば，教育実践，とりわけ学級経営における重要な潜在的カリキュラムと言える。教師自身が，教師であるが故の特質を自覚しながら自らの教育実践に配慮を加えることは，学級経営上の失敗を回避するための有効な手段となり得る。

筆者は，これまでに，「小学校教師の特質は何か」という課題を，文学作品に描かれた教師像を探ることによって明らかにしようとした[2]。日本文学には教育や教師を描いた作品が数多くある。社会の評価を獲得し現在まで受け継がれてきた文学には，それぞれの時代背景のもとでの学校や子ども，教師を的確に捉えていると言われる[3]。作者自身の教職経験に基づいた作品も多い。政策的，意図的に作り上げられた社会的存在としての教師像ではなく，日常生活の中で身近な存在としてあった教師が人々の目にどのように映っていたかという実体を反映した教師像を見ることは，教師の特質を把握する上で適切であろう。

従来の研究[4]も，文学の中に教師像を求めることの意義を強調している。久冨善之（1988）[5]は，教育社会学の視点から，今後の教員文化研究の対象論と方法論に言及して，教育小説，教員小説などの文学も検討対象になると指摘する。しかしながら，変遷する教師像の中から，時代を越えてなお変わることのない教師の特質を明らかにしようとした研究は見られない。

また，教師像を描き出す先行研究は研究方法に共通点を持つ。教育の歴史の中に教師像を位置づけながら，時代を代表する作品のいくつかを取り上げ，その粗筋と登場する教師の性格や行動，世間の反応などを要約するという手順で進められている。小学校，中学校，高等学校の教師が混在していることも共通する。

教師の特質を探ることを目的とする本研究においては，時代ごとに該当する作品全体を分析対象としそこから底辺を流れる共通項を見つけ出そうとする。さらに，登場する人物を小学校教師に限定していることも

＊　東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
＊＊　東京学芸大学（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）

方法上の特徴である。時代や社会状況が変われば，そうした特質が異なることも考えられる。そこで本論文では，前論文で得られた結果を拠り所とし，現代の作品を多数加える[6]ことによって現在の教師の状況を詳細に検討し，改めて現在をも含めた小学校教師の特質を明らかにする。

２．文学から探る小学校教師の特質

「明治初期から現在まで，脈々と受け継がれてきている教師の特質は何か」という問いの答えを文学作品の分析を通して明らかにする。分析対象資料は，我が国における学校教育誕生の時代から現在に至るまでの約140年間に著された，小学校教師を描く作品48冊である。比較検討の指標は，①貧困，②多忙と多忙感，③葛藤，④期待される教師像，⑤小学校教師に対する世間の目，⑥子どもに対する教師の態度，⑦教師間の関係という教師の状況をあらわす７観点である。７観点設定の理由は，全作品通読直後の課題意識と筆者の20余年の教職経験における参与観察の結果に基づくものである。

全作品を概観すると，時代により，作品により，実に多様な教師が登場しそれぞれ別個の教師人生を歩んでいるのであるが，同時に多くの教師が似通った，特有の雰囲気を醸し出していることに気づく。我が国において初めて職業としての教師が誕生した明治時代の文学には，主人公として登場する教師の日常やその心情を詳細に描いた作品が多い。教師という新しい職業に対する興味と関心の高さがうかがわれる。ここで捉えられた教師像が，その後の時代の流れの中にあっても本質的に変わることのない日本の教師として規定された姿ではないのかという問いかけが筆者の読後感であり，課題意識である。社会状況の変化は，教師の境遇に変化をもたらすが，教師の立ち位置や内面性の変容にまでは及んでいない。日本の教育の変遷は，教師に対する役割期待の変遷ではなかったことを物語る。さらにそれは，現在においても継続している。過去の教師の姿に現在の教師の姿を重ね合わせることができるのである。明治時代の教師たちの状況として顕著に見られたものが先に掲げた７観点である。これらの観点は，教師文化の研究において既に指摘され周知されているものである。今回改めて取り上げたのは，他の研究方法では見過ごされやすい教師の持つ潜在的傾向を表出したいと考えるからである。

２．１　文学から導き出された小学校教師の特質

表１は，明治時代から現在までに著された小学校教師を描く文学作品48冊を分析対象資料とし，観点①から⑦の内容が作品中に描かれているか否かを表したものである。時代・時期区分は先行研究を参照し，戦後部分は教師の姿の変化に対応させた分類法を用いた[7]。また，対象作品は，出版年ではなく，その作品が描写する内容の時代・時期に合わせている。

表２は，表１の結果に基づいて，７観点それぞれが文学作品に描かれた割合を提示したものである。

次に，表３は，各観点が描かれた割合を時代ごとに整理したものである。このうち，「教師の貧困」という状況は教師文学における主要なテーマとしてかつては確かに存在したが，1960年代を境にしてその後現在に至るまで全く現れていない。他の６観点は，取り扱われ方の軽重に時代の特徴が見受けられるものの，現在の教師文学においても描写され，明治期から一貫して見られる教師の状況であると言える。最新の作品として取り上げた『５年３組リョウタ組』（2006）には，これら6観点すべてが描かれている。今回，教師の特質を再吟味するにあたって，「教師の貧困」を除く６観点を比較検討の指標とする。

２．１．１　教師の多忙と多忙感

教師は，傍目からは，子どもと一緒に遊んだり勉強を教えたりする気楽な仕事，すなわち，「泰平の閑人の代表者」（『教師の自白』）のように思われている節がある[8]。そのためか，教師の多忙について言及している作品は，他観点と比較して多いとは言えない。さらに，教師が主役の座から背景へと移行してきた1966年以降の作品にはほとんど見られない。しかし最近，教師を主人公に置く作品が少数ではあるが再び現れてきている[9]。学校や教師たちに対する入念な取材を経て世に送り出された作品は，現在の教師の状況を少なからず反映しているものと考える。

「日々の長い勤務と，多数の生徒の取扱とに疲れて」[10]（『破壊』），「世帯やつれした女教員の汚らしい髪の毛」[11]（『囚われた大地』），「朝っぱらから疲れ切ったように，陰気くさく」[12]（『白い壁』），「三十になっても母に洗濯をさせたりするほど忙しい教師の仕事」[13]（『忘れ霜』），「良心が彼等を重労働に追いやる」[14]（『人間の壁』）などの表現は教師の多忙ぶりをうかがわせる。その中で，明治40年代に小学校校長であった柳沼蓬水が著した『教師の自白』には教師の多忙さが克明に描かれている。柳沼は，教師の多忙を「教員酷使」であると表現し，「生命ある教育は栄養不足睡眠不足で半ば神経衰弱症に罹って居る教師の出来ることでは

表１　作品と観点の関係

時代・時代区分	作品名　＊（　）内は初出年をあらわす	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
明治維新	島崎藤村『夜明け前』（1929-1935）				●			
明治初期	徳富蘆花『思出の記』（1900-1901）			●				
明治20年代	中勘助『銀の匙』（前編1912, 後編1913）				●			
	国木田独歩『酒中日記』（1902）	●		●	●	●		
明治30年代	島崎藤村『破戒』（1906）	●	●	●	●	●		
	田山花袋『田舎教師』（1909）	●		●	●			
	石川啄木『雲は天才である』（1906）	●		●	●			
	石川啄木『足跡』（1909）	●			●		●	
	石川啄木『葉書』（1909）							
明治40年代	柳沼蓬水『教師の自白』（1912）	●	●	●	●	●	○	●
大正前期	新田次郎『聖職の碑』（1976）				○	●	●○	
	谷崎潤一郎『小さな王国』（1918）	●			●		●	●
	山本有三『波』（1928）	●			●			
大正後期	井上靖『眼』（1964）			●		●		
昭和前期	壺井栄『二十四の瞳』（1952）	●		●	●			
	平田小六『囚われた大地』（1933-1934）	○	●	●	●			●
	本庄陸夫『白い壁』（1934）		●	●	●		●	
	須井一『幼き合唱』（1932）	●		●	●			●
	黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』（1979）					●	○	
	柏原兵三『長い道』（1969）				●	●		
	三浦綾子『石ころの歌』（1972-1973）		●	●	●		●	
戦後第１期（戦後-1965年）	阿久悠『瀬戸内少年野球団』（1979）				○		●	
	壺井栄『忘れ霜』（1955-1957）	●	●	●		●		
	椎名誠『白い手』（1989）						●	
	石川達三『人間の壁』（1957-1959）	●	●	●	●	●	●	●
	伊集院静『機関車先生』（1994）							
	三好京三『体あたり先生』（1994）		●		●		○	●○
戦後第２期（1966-1977年）	佐野洋『かわいい目撃者』（1973）					●	●	●
	灰谷健次郎『兎の眼』（1974）						●	
	落合恵子『そっとさよなら』（1977）			●		●	●	●
	氷室冴子『いもうと物語』（1991）						●	
	重松清『きよしこ』（2002）					●	●	
戦後第３期（1978-1987年）	井上ひさし『偽原始人』（1979）			●	●	●		●
	東野圭吾『浪速少年探偵団』（1986）							
	佐藤愛子『凪の光景』（1987-1988）					●		
戦後第４期（1988年-現在）	宮部みゆき『サボテンの花』（1989）					●		●
	山田詠美『風葬の教室』（1988）					●		
	山田詠美『蝶々の纏足』（1987）							
	灰谷健次郎『海の物語』（1巻1988,2巻1993）							
	宮部みゆき『とり残されて』（1992）				●	●	●	
	東野圭吾『しのぶセンセにサヨナラ』（1988）						●	
	雫井脩介『クローズド・ノート』（2006）		●	●	●	●	●	●
	森絵都『永遠の出口』（2003）			●	●	●	●	●
	重松清『小学五年生』（2007）						●○	
	宮内婦貴子『ピュア・ラブ　紅絲編』（2004）		●		●	●	○	●
	赤川次郎『大変身！ママの七つの顔』（1998）		●		●			
	岡田智彦『ＢＧＭ』（2004）					●	●	
	石田依良『５年３組リョウタ組』（2006）		●	●	●	●	○●	●○

＊　○は、描かれた教師像が●と逆の内容になっていることを示す
観点①「教師の貧困」においては、●は貧困にあえぐ教師、○は給料が高く生活に余裕がある教師
観点④「期待される教師像」においては、●は社会や保護者から期待される教師、○は教師と子どもは横の関係
観点⑥「子どもに対する教師の態度」においては、●は子どもに対して権威的・権力的に接する教師、○は子どもを尊重する教師または子どもにおもねる教師
観点⑦「教師間の関係」においては、●は競争関係や個人主義、○は協働の関係や仲間意識

表２　７観点が文学作品に描かれた割合

観点	教師の貧困	教師の多忙	教師の葛藤	期待される教師像	小学校教師に対する世間の目	教師の子どもに対する態度	教師間の関係
のべ冊数	13	12	19	27	22	27	16
割合（%）	27	25	40	56	46	56	33

表３　時代ごとに描写された作品数とその割合

時代区分（冊数）	教師の貧困	教師の多忙	教師の葛藤	期待される教師像	小学校教師に対する世間の目	教師の子どもに対する態度	教師間の関係
明治（10）	6（60%）	2（20%）	6（60%）	8（80%）	3（30%）	2（20%）	1（10%）
大正（4）	2（50%）	0（0%）	1（25%）	3（75%）	2（50%）	3（75%）	1（25%）
昭和戦前（7）	3（43%）	3（43%）	5（71%）	6（86%）	2（29%）	3（43%）	2（29%）
戦後1期（6）	2（33%）	3（50%）	2（33%）	3（50%）	2（33%）	4（67%）	3（50%）
戦後２期（5）	0（0%）	0（0%）	1（20%）	0（0%）	3（60%）	5（100%）	2（40%）
戦後３期（3）	0（0%）	0（0%）	1（33%）	1（33%）	2（67%）	0（0%）	1（33%）
戦後４期（13）	0（0%）	4（31%）	3（23%）	6（46%）	8（62%）	10（77%）	6（46%）

ない」として，「唯教員が無暗滅茶苦茶に働きさえすればそれで教育全体の成績が上ると思って居る」ことに対して鋭い警告を発している[15]。ここに描かれる教師の１日は現在の教師の１日と全く同じであるが，さらに石川達三は，「戦後の教師は，戦前の教師に比べて仕事が倍になった」[16]と書く。それから半世紀を経た現在においても，教師の悩みの一つは雑務の多さであると言う。例えば書類の量だけでも，10年前と比較して2.5倍に増加しているとも言われている[17]。

大正期は教師の多忙に言及した作品は見当たらないのであるが，これは大正期に多忙問題が存在しなかったと言うわけではない。大正15年に発行された雑誌『教育研究』に，「小学教師の仕事」と題した福岡県の一女教師の投書が掲載されている[18]。この投書は，「小学校教師の仕事の多いのにホトホト閉口しています」という書き出しで始まり，「工場の女工以上の労働を強いられています。工場法のように勤務時間の制限などは出来ないものでしょうか」と結ばれている。教職経験１年余りのこの女教師だけのことかと思って先輩や友人，男子の先生方にも尋ねてみたが，皆一様に仕事の多さに閉口しているとのことであったというのである。ここで描写される教師の１日も明治40年代の教師の１日と何ら変わりはない。大正期の小学校教師も，多忙に苦しんでいたことがうかがわれる。

このような明治，大正，昭和期における小学校教師の状況は，「ふだんは十時過ぎまで学校に残って，雑務を片づけるのがあたりまえだった」[19]（『５年３組リョウタ組』）という言葉に代表されるように現在の小学校教師にも共通する。2007年実施の調査結果[20]によれば，小学校教師の退勤時刻は，調査を重ねるごとに遅くなり，「７時ごろ」以降に退勤する教師が半数を超えていることが示されている。

自分の学級の雑事だけで毎日遅くまで残業を続ける教師は，他の学級で問題が起こったときに，「こっちにだって，自分のクラスがあるんだからいそがしくてよその面倒まで見られません」[21]（『５年３組リョウタ組』）と迷惑そうに言う。教師の多忙や多忙感は，自分の学級のことだけで手一杯で他の学級にまで関わりたくないという感情を生じさせる。

多忙さによって，教師が獲得するに至った特質は，

「自分の仕事が過重になることは解っていても，（こうした方がいいのだ）と思われることは，やらなくては気がすまない」[22]（『人間の壁』）という教師の使命感がもたらす良心や努力，満足感，充実感と，重労働の結果として現れてくる活気がない・精気がない・疲労感・徒労感，さらに，今回の検討から自分の学級さえよければという個人主義的傾向，すなわち「学級王国」意識[23]が新たに付加される。

２．１．２　教師の葛藤

教師が教育界において絶えずジレンマや葛藤を抱える立場にあることは，明治初期から最近の文学作品にまで幅広く表れている。かつて郡視学は，教員の「教員生命に関する生殺与奪の実権」[24]（『教師の自白』）を握り，校長は，「教員の喉笛を握って」[25]（『白い壁』）いた。小学校教員は「町村の傭人」[26]（『教師の自白』）であるから町村人の言うことも聞かなければならない。それ故，教員には自らの考えで教育を行う自由はなかった。自由をふりまわした『幼き合唱』の佐田万次郎は，程なくこの自由のためにひどい復讐を受けることになり教職を追われるのである。近年では『偽原始人』に登場する女教師遠藤容子の例がある。「規定いっぱい産休をとるような先生に子どもを任すことはできない」[27]という母親たちが校長先生に掛け合い，さらに教育委員会にまで電話をかけたり手紙を書いたりして排斥運動を起こす。追いつめられた遠藤先生は自殺を図り，その後も後遺症に苦しんでいる。

現在の教育現場においても保護者からの苦情の対応に苦慮する学校や教師の姿が報告されている[28]。現代文学においても同様である。青年教師良太の学校では，クラス運営と学習の習熟度を採点して学年５学級の中で順位をつけている。給与が変わるわけでも，昇進するわけでもないが，職員室やPTAの評価が変わるこのクラス競争に教師たちは振り回されている。クラス競争でトップになるために答案に手心を加えた先生や，試験のために授業時間を使うのは禁止されているにもかかわらず，背に腹は替えられないとばかりに秘密裏にルールを破る先生たちもいる。教育熱心な父母の間では，クラス競争の結果は最重要視され，順位が悪ければうちの子の担任からはずせと言ってくる保護者もいる（『５年３組リョウタ組』）。

このように自分の意志や願いと外部からの期待や要求との狭間で揺れ動きながらジレンマや葛藤を抱える教師の立場から身につけたであろう特質は，我慢強さや謙虚さが長所として評価される反面，目立つ言動をしないようにと自己規制し，物事に慎重に対処する，従順，二面的性格などの特徴を併せ持つ。加えて外部からの要請に翻弄されながら，「学級王国」意識を醸成させていく特質が浮かび上がる。

２．１．３　期待される教師像

期待される教師像には２つのイメージを伴う。１つは，国や社会が求める教育の目的や親の願いを忠実に実践する教師であり，今１つは学級運営が上手な教師である。

明治期に求められた教師像は，聖職意識に支えられて「忠孝仁義，善悪邪正を真面目な顔をして説く」[29]（『酒中日記』）教師であり，「規定の細目を守って，一毫乱れざる底に授業を進めて行く」[30]（『雲は天才である』）教師である。また，昭和前期においても「国家の教育がどうだろうとは，君等の如き一教員の云々すべきことではない。君等はそれを黙って遵奉していればいいんだ」[31]（『囚われた大地』）という郡視学の言葉に代表されるように言われたことを黙々と実行する教師である。戦後第３期になると，進学競争のあおりを受けて，中学受験をひかえている子どもたちに勉強を熱心に教える教師が親たちの希望である。学力重視を唱える現在においても，学級や子どもの成績向上という実績を残すことが，教員評価の中で最も重要度の高い指標だという[32]。

第２は学級運営が上手な教師である。『足跡』の千早健が受け持つ組はその規律の良いことで他級の生徒や上級生たちの模範となっている。『小さな王国』の教師貝島昌吉も，「皆さんがそんなにお行儀がいいと先生も実に鼻が高い」と子どもたちを褒め，「此が一時の事でなく，いつ迄も続くように，そうして折角の名誉を落とさないようにしなければいけません」[33]と説く。

逆の例もある。『石ころの歌』で紹介されているのは毎朝の朝礼時の様子である。この朝礼で，各学級の訓練の程が分かると言う。訓練の悪い先生の生徒は目がきょろつき，頭が動く。歩き方も乱れる。訓練の悪い先生と言われないために，教師たちは厳しく，女教師までもが容赦なく体罰を加える。現在において今崎明子（『とり残されて』）は生徒指導の点ではあまり評判のいい教師ではない。頼りないというのである。明るい，存在感があるといった人柄の良さに加えて，クラスをまとめる力，学級で起こったトラブルへの対応力など，いわゆる学級経営力の優れた教師が求められている[34]。

前述した『５年３組リョウタ組』で描かれるクラス競争の結果はすぐに子どもたちの親にも伝わる。学級運営の風当たりは成績の善し悪しに左右されるという。クラス競争の上位にいることの学級運営上のメ

リットは非常に大きい。また，クラス競争の評価が下降気味の教師には，「自分のクラスもしっかりみてくださいよ。小学校では自分のクラスが一番です」[35] と管理職は叱咤激励する。自己学級の成績が何よりも優先されるとする保護者や管理職からの期待は，一面学級王国的学級経営を奨励する役割を果たす。期待に応えようと奮闘する教師は「学級王国」意識を持つであろう。現在，東京都教育委員会の目指す教師像の第１は，社会の変化や子供・保護者の願いを的確に捉え実践的指導力や企画力を高める教師である[35]。文学が描く期待される教師像と一致する。

２．１．４　小学校教師に対する世間の目

世間が教師に向ける眼差しには矛盾を含む。将来を託す子どもたちを立派な人間に育てるという崇高な目的を持った仕事であることは誰もが認めるところであるが，反面，子ども相手の仕事であるが故に，気楽な仕事のように見られたり，かつては貧しさの代名詞のように思われたりした教師に，軽蔑の色を含んだ一瞥も注がれる。「教員に対して酷しい軽蔑の色を示す人々」[37]（『破壊』），「世間の人が教師を見る目には矛盾したものがある。（貧乏教師。下積みの生活者。能力の劣った者が教師になる。第二の国民を育成する仕事。聖職者）彼等は一面では教師を軽蔑しながら，一方では最高の人格を要求する」[38]（『人間の壁』）などは教師に対する世間の評価を表す。

現在でも，「何十人の子供に慕われるって，すごいこと，そういうのを尊敬しちゃうから，私もそうなりたい」[39]（『クローズド・ノート』）と憧れの思いを語る教員志望の大学生がいる反面，「公立校なんて，先生も生徒も落ちこぼればかりだ」[40]（『５年３組リョウタ組』），「やる気がないとか，サラリーマンのようだといわれる普通の先生」[41]（『５年３組リョウタ組』），「教師が天職でもなく，教える才能があるわけでもなく，日々淡々とこどもたちと勉強を続ける職業としての教師」[42]（『５年３組リョウタ組』）という批判を含んだ目も同時に存在する。

このように相反する眼差しを向けられる教師は，世間に対して防衛的な姿勢をとらざるを得ない。また，教師自身も教職に誇りを感じ，世間からの批判を避けて尊敬を得たいという気持ちを少なからず持っている。そのため世間の感情を敏感に察知し，それに合致した行動様式を教師自らが選択している面もある。

「なぜか世のなかの人は，教師がまったく遊びのない，まじめ人間であることを求めるのだ。また，期待された役を演じていたほうが，なにかと便利なこともある」[43]（『５年３組リョウタ組』）とつぶやく若い教師は，心の中では何を考えていても，顔のおもてだけは真剣な振りをするという教師になって学んだテクニックを既に活用している。

ここから生じる教師の特質には，教育者としての誇りや自負・真面目・親切などの積極的な側面と，常に世間の厳しい目に晒されていることから派生する緊張感・優柔不断・地味・保守的・事なかれ主義・振りなどの消極的な側面を併せ持つ。また，前項の「期待される教師像」で紹介した「学級運営の風当たりは成績の善し悪しに左右される」という保護者からの視線は世間の目の窓口でもある。教師が保護者の目を意識してうまくいっている学級づくりに腐心することは，「学級王国」意識形成の可能性を持つ。

２．１．５　子どもに対する教師の態度

明治期から現在まで，教師は子どもに対して権力とも言うべき力を持っている。そして，その力をうまく利用して子どもと接することの方が教師としての評判もよい。『足跡』の千早健や『小さな王国』の貝島昌吉などは，常日頃の子どもたちへの指導に熱心であるが故に，多少の厳しさを持ってしてもそれがためにかえって，子どもや父兄の尊敬や信頼を得ることになっている。また戦後第２期においても，『かわいい目撃者』に登場する若い女教師竹内順子は，授業中子どもたちが集中しなくて騒がしくなった時に教師の権威を背景にした奥の手を使って子どもたちを静める。教師が子どもに対して絶対的な力を持っていた頃の作品には，体罰をも辞さない教師が男女を問わずに登場する。

子どもが教育の主体者として登場するのは僅か２作品である。『聖職の碑』と『窓ぎわのトットちゃん』である。いずれも大正新教育の流れをくみ，子どもたちの個性を尊重する教育を理想とする。しかし，両者ともその主張が正しく理解されることなく衰退していく様子が描かれている。

現在においては，必要悪としての教師の絶対性を認め子どもに対して威圧的に接する教師がいる[44] 一方，子どもの目線に合わせて，子どもと教師の間での価値の共有体験の有無が小学校教育の成否を決めると信じる教師[45] も同時に存在する。前者はいわゆる肯定されざるべき学級王国の典型であり，後者は教師と子どもが良好な関係を築き強い絆で結ばれながら，同じ目標に向かって学級を創っていくという積極的側面を有する学級王国のもう一方の姿として描かれる。方向性は異なるが，「学級王国」意識の存在は両者に認められる。

最近では，教師の子どもに対する厳しさや威圧的な態度は影を潜めている。しかし，学級がうまく機能し

ない状況の直接的な要因として子どもと教師の関係が指摘される中で，教師の高圧的な指導や一方的に押し進める姿勢も認められている[46]。子どもを「かくあるべし」という固定観念に囚われて見ている教師が少なからず存在していることを示唆している。

２．１．６　教師間の関係

教師間の関係には複雑なものがある。教師によって学習指導や学級経営のやり方に違いが見られると保護者に不安を与えたり学級同士を比較されたりすることが起こりやすい。戦後第２期の『かわいい目撃者』には，そのような保護者の不安を解消し，また学校に対する苦情を回避するという意図からも，教室の模様や整頓方法を全ての学級で同じにしている１年生の担任教師たちが描かれている。同調圧力の強い，同質性を確保する関係である。しかし，たとえ学習の進度や生活の内容を統一したとしてもそれぞれの組み立て方や進め方は各教師に任されている。教室は担任教師の力量発揮の場でもある。このことは，たくさんの共同研究を行いながらも教師間にある種の個人主義を生む。他の教師に負けてはならないという責任感は，チームワークを必要とする仕事でありながらも同時に競争心や秘密主義，教師としての自分の能力を誇示したい気持ち，対抗意識などの傾向をも生じさせる[47]。

この特質は現在においても継続される。教員の評価にも成果主義が入り込んでくると，教師のプライドをかけた競争が始まる。自分以外をライバルと見なし相談もできない。職員室の教師たちは形だけの挨拶をかわし，誰もが見知らぬ他人のようにお互いに接する。このような教師間の関係は，教師ひとりひとりが自分の教室に籠もるようになる。また，同僚や先輩の教師たちと良好な人間関係を築くことができない教師も，教室を逃避の場所とする（『５年３組リョウタ組』）。学級担任の教師を学級に追い込み孤立させる学校経営の形態や人間関係の煩わしさからの逃避の意識[48]は，「学級王国」意識そのものである。

２．２　まとめ

文学作品の分析を通して，明治期より現在の教師に至るまで伝達・継承・再生産を繰り返していると仮定される教師の行動や態度，価値観などの特質は表４に示すとおりである。ここでは，前論文において導き出された小学校教師の特質が，現在の教師にあってもまさしく相当することが確証され，新たに６観点全てにわたる特質として「学級王国」意識が追加されたことが提示される。

３．おわりに

本稿では小学校教師の特質について再検討してきた。現代の作品を追加することを通して導き出された教師の特質は，先に得られた結論に，さらに新たな特質を付加させることになった。これは則ち，明治期から現在まで一貫して伝達，継承，再生産を繰り返していると仮定される教師の特質が確かに存在することを再確認しつつ，同時に現代に特有の教育事情に適応する質的変化の兆候が認められることを示唆している。全く新しい特質が加えられつつあるということではなく，これまでは「教師間の関係」から導き出されるにとどまっていた「個人主義」的傾向が，全ての観点にわたって「学級王国」意識をいう新たな名称を獲得して顕在化したものと言えよう。

教師が，教師であるが故の自らの特質を自覚し意識

表４　文学作品の分析から導き出された小学校教師の特質

観点（教師の状況）	派生する特質
教師の多忙	使命感・誠実・良心・努力・満足感・充実感 活気がない・疲労感・徒労感・「学級王国」意識
教師の葛藤	我慢強さ・謙虚さ 自己規制・慎重・従順・二面的性格・「学級王国」意識
期待される教師像	忠実・真面目・人柄がよい・学級運営が上手 二面的性格・「学級王国」意識
小学校教師に対する世間の目	教師としての誇りや自負・親切・真面目・緊張感・優柔不断 保守的・地味・事なかれ主義・振り・「学級王国」意識
教師の子どもに対する態度	教師として期待する、望ましい子ども像の保持・操作的 「かくあるべし」という固定観念の強さ・「学級王国」意識
教師間の関係	チームワーク・責任感・個人主義・競争心・秘密主義 対抗意識・自己顕示欲・「学級王国」意識

的な配慮を加えながら学級経営を行うことの重要性は前論文において指摘されたところである。本論文では，学年・学校経営の形態が教師の個人主義や「学級王国」意識を助長させる潜在的な役割を果たすことが確認される。教師の特質を考慮した意識的な学級経営と並行して，教師の特質を考慮した意図的，自覚的な学年経営，学校経営が求められる。

最初に述べたように，今回の考察は文学に現れた教師像から導き出されたものであり，従って仮説として提唱されるものである。しかしながら，「本音」を簡単には明かさないという特質を有する教員文化の研究は，いわゆる客観的調査方法を用いることによっても困難を伴う。正面から教師と対峙するわけではないが，さりげない観察や交渉をふまえて小学校教師を全体像として捉える文学の中に教師の本音や教師文化の本質を見出すことのできる可能性は大きい。フィクションではあるが実像のイメージを強く保持するからである。本研究が指摘する仮説の妥当性や信頼性について検証されることが望まれる。

今後は，現実の教師に目を転じ，学級がうまく機能しない状況に陥った教師たちの思考・行動様式の中に，本論文で明らかにされた教師の特質が反映されているかどうかを見極めたいと考えている。

註

1）久冨善之「教師と教師文化」，稲垣忠彦・久冨善之編『日本の教師文化』東京大学出版会，1994，p.13.

2）佐藤郁子・平野朝久「文学から探る小学校教師の特質 ―明治初期から現在までの縦断的比較検討 ―」東京学芸大学紀要　総合教育科学系 第59集，2008，pp.49-60.

3）伊ケ崎暁生『小説の中の教師たち　明治・大正・昭和の作家たちが描く教育・教師観』みくに書房，1986，p.353.

4）①前掲書３）
②西郷竹彦『文学の中の教師像』明治図書，1970.
③陣内靖彦編『メデイアに描かれた教師像　東京学芸大学大学院修士課程「教育社会学特講」平成11年度調査報告書』，2000.

5）久冨善之編著『教員文化の社会学的研究』多賀出版，1988，p.286.

6）分析対象資料の40)-48)
本研究開始時の分析対象作品は，４）の先行研究を参考資料とし，小学校教師の登場する作品39冊を選定した。今回本論文をまとめるに当たり，先行研究以降に発表された作品を中心に９冊を新たに見出し追加した。

7）前掲書４）③のp.18.

8）柳沼蓬水『教師の自白』敬文館，1912，p.301.

9）分析対象資料46）と48）

10）島崎藤村「破壊」『日本文学８ 島崎藤村集 (1)』筑摩書房，1970，p.17.

11）平田小六『囚われた大地』北の街社，1978，p.187.

12）本庄陸男『白い壁』雨の日文庫５＜現代日本文学・昭和戦前編＞芝書房，1969，p.5.

13）坪井栄『忘れ霜』壺井栄作品集20筑摩書房，1958，p.33.

14）石川達三『人間の壁（上)』岩波書店，2001，p.96.

15）前掲書８）のp.273.

16）前掲書14）のp.75.

17）諸富祥彦『モンスターペアレント！？』アスペクト，2008，p.86.

18）東京高等師範学校附属小学校内初等教育研究会『教育研究』299号，1926，p.131.

19）石田依良『５年３組リョウタ組』角川書店，2008，p.147.

20）ベネッセ教育研究開発センター『第４回学習指導基本調査』，2007.

21）前掲書19）のp.48.

22）前掲書14）のp.96.

23）文部省（編）『小学校生徒指導資料6　生徒指導をめぐる学級経営上の諸問題』大蔵省印刷局，1989，p.9.「学級王国」意識とは，「担任する学級の中に学級担任自身が自らを追い込み，学年や学校の方針を考慮せずに学級の独自性を強調し，また，他の教師などとの意思の疎通も図らずに孤立するような，意識や行動の特徴的な傾向としてとらえられる」と定義されている。「学級王国」意識の形成は，さまざまな要因が複雑に絡み合っていると分析されている。

24）前掲書８）のp.336.

25）前掲書12）のp.8.

26）前掲書８）のpp.202-203.

27）井上ひさし『偽原始人』新潮社，1979，p.30.

28）前掲書17）

29）国木田独歩『酒中日記』新潮文庫，新潮社，1970，p.152.

30）石川啄木『雲は天才である』河出書房，1949，pp.24-25.

31）前掲書11）のp.68.

32）前掲書19）のp.382.

33）谷崎潤一郎「小さな王国」『現代日本文学大系30谷崎潤一郎全集 (1)』筑摩書房，1969，p.274.

34）雫井脩介『クローズド・ノート』角川書店，2006，p.142.

35）前掲書19）のp.231.

36）東京都教育委員会平成15年度報道発表資料「東京教師養成塾設置について」，2003年９月11日.

37）前掲書10）のp.7.

38）石川達三『人間の壁（下)』岩波書店，2001，p.255.

39）前掲書32）のp.293.
40）前掲書19）のp.91.
41）同上書 のp.119.
42）同上書 のp.119.
43）同上書 のp.130.
44）岡田智彦『BGM』河出書房，2005，p.120.
45）前掲書19）のp.350.
46）大久保正廣『「良心」の教育神話』文芸社，1999，p.11.
47）石川達三『人間の壁（中）』岩波書店，2001，p.82.
48）前掲書23）のp.9.

分析対象資料

1）島崎藤村『夜明け前』新潮社，1955.
2）徳富蘆花『思出の記』集英社，1974.
3）中勘助『銀の匙』岩波書店，1935.
4）国木田独歩『酒中日記』新潮社，1970.
5）島崎藤村「破戒」『日本近代文学大系第13巻』角川書店，1971.
6）田山花袋『田舎教師』新潮社，1952.
7）石川啄木『雲は天才である』河出書房，1949.
8）石川啄木『足跡』河出書房，1950.
9）石川啄木『葉書』河出書房，1950.
10）柳沼蓬水『教師の自白』敬文館，1912.
11）新田次郎『聖職の碑』講談社，1976.
12）谷崎潤一郎「小さな王国」『現代日本文学大系30　谷崎潤一郎全集（1)』筑摩書房，1969.
13）山本有三「波」『山本有三・菊池寛集』筑摩書房，1972.
14）井上靖『眼』新潮社，1975.
15）壺井栄『二十四の瞳』新潮社，1957.
16）平田小六『囚われた大地』北の街社，1978.
17）本庄陸男『白い壁』雨の日文庫５＜現代日本文学・昭和戦前編＞芝書房，1969.
18）須井一「幼き合唱」『日本プロレタリア文学集29　谷口善太郎集』新日本出版社，1986.
19）壺井栄『忘れ霜』壺井栄作品集20 筑摩書房，1958.
20）黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社，1981.
21）柏原兵三『長い道』中央公論社，1989.
22）三浦綾子『石ころの歌』角川書店，1979.
23）阿久悠『瀬戸内少年野球団』文藝春秋，1983.
24）石川達三『人間の壁（上）（中）（下)』岩波書店，2001.
25）佐野洋『かわいい目撃者』集英社，1979.
26）灰谷健次郎『兎の眼』角川書店，1998.
27）井上ひさし『偽原始人』新潮社，1979.
28）落合恵子『そっとさよなら』集英社，1977.
29）氷室冴子『いもうと物語』新潮社，1994.
30）東野圭吾『浪速少年探偵団』，講談社，1986.
31）佐藤愛子『凪の光景』朝日新聞社，1988.
32）宮部みゆき『サボテンの花』文藝春秋，1993.
33）山田詠美『風葬の教室』新潮社，1997.
34）山田詠美『蝶々の纏足』新潮社，1997.
35）灰谷健次郎『海の物語』角川書店，1999.
36）椎名誠『白い手』集英社，1992.
37）伊集院静『機関車先生』，集英社，2003.
38）宮部みゆき『とり残されて』，文藝春秋，1995.
39）東野圭吾『しのぶ先生にサヨナラ』，講談社，1996.
40）三好京三『体あたり先生』勁文社，1994.
41）赤川次郎『大変身　ママの七つの顔』読売新聞社，1999.
42）森絵都『永遠の出口』集英社，2003.
43）宮内婦貴子『ピュア・ラブ　紅絲編』毎日新聞社，2004.
44）岡田智彦『BGM』河出書房，2005.
45）重松清『きよしこ』新潮社，2005.
46）雫井脩介『クローズド・ノート』角川書店，2006.
47）重松清『小学五年生』文藝春秋，2007.
48）石田依良『５年３組リョウタ組』角川書店，2008.